

農業技術情報

令和3年8月15日

池田町農業構造政策推進協議会

十勝農業改良普及センター

十勝東部支所 015-572-3128

J A 十勝池田町 572-3131

高島支所 573-2111

池田町産業振興課 572-3118

農作物の生育・作業の状況（池田町 8月15日）（ ）内は平年値、斜体は前年値

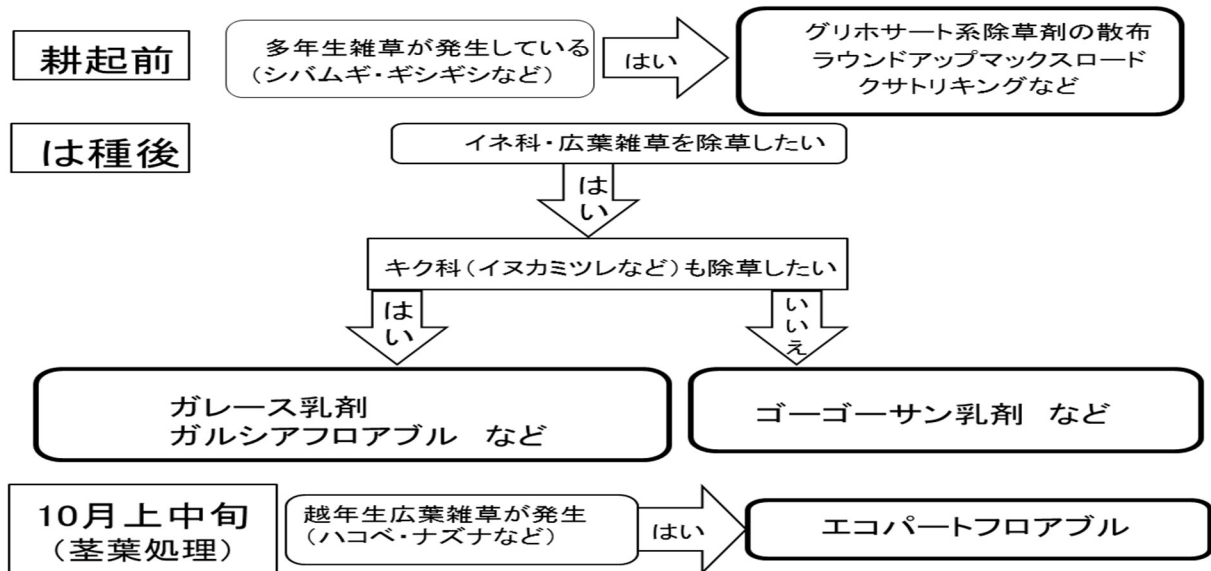
作物名	遅速日数	生育状況		生育状況 農作業状況
秋まき小麦				収穫終 7/31(8/1)
馬鈴しょ(メークイン)	+5	茎長 77.5(84.9)cm		茎葉黄変期 8/5(8/10)
馬鈴しょ(男爵)	-	茎長 53.3(<i>61.5</i>)cm		
てん菜(移植)	+4	草丈 59.8(59.2)cm 葉数 35.5(27.2)枚	根周 33.9(32.8)cm	
てん菜(直播)	+2	草丈 55.7(56.9)cm 葉数 20.9(25.2)枚	根周 28.9(28.2)cm	
大豆	+6	草丈 59.5(70.6)cm 葉数 9.0(9.5)枚	着莢数 434.0(372.0)個/m ²	
小豆	+2	草丈 56.5(50.6)cm 葉数 10.9(9.4)枚	着莢数 130.3(11.3)個/m ²	
菜豆 (大正金時)	+6	草丈 42.5(50.4)cm 葉数 3.7(4.2)枚	着莢数 161.1(128.5)個/m ²	
菜豆(福勝)	-	草丈 49.4(<i>56.3</i>)cm 葉数 4.1(<i>4.6</i>)枚	着莢数 132.1(<i>154.3</i>)個/m ²	
菜豆(手亡)	+6	草丈 66.6(51.3)cm 葉数 7.6(7.4)枚	着莢数 230.1(178.2)個/m ²	
牧草	-6	草丈 68.0(76.0)cm		
サイレージ用 とうもろこし	+4	草丈 297.5(308.6)cm 出葉数 17.5(16.9)枚	稈長 262.0(279.8)cm	
直播たまねぎ	-	球径 67.0(<i>71.1</i>)mm		

1 秋まき小麦

(1) 雑草対策

次年度産秋まき小麦のは種前後の除草は、優占雑草種に応じた除草剤を選択してください。雑草が小麦に与える害としては「養水分の収奪」「病虫害繁殖の助長」などがあり、結果的に収量、品質の低下に繋がります。除草剤を適正に使用し、雑草対策を行ってください。

<雑草の種類に応じた除草体系例>



★秋まき小麦ほ場のイネ科雑草は越冬後に対処することは難しいので、必ず秋処理を行って下さい。

表 1 耕起前の除草剤例

薬剤名	処理方法・使用時期	薬量(/10a)	回数	注意事項
ラウンドアップ マックスロード	耕起前(雑草生育期) (水量 25~100ℓ)	200~500mℓ	3回	・多年生イネ科雑草が15cm以上再生してから散布。 ・展着剤を加用しない。
タッチダウンiQ	〈一年生雑草〉 耕起前(雑草生育期)	200~500mℓ	1回	・散布後6時間は降雨がない日に散布。(ラウンドアップマックスロードは1時間、タッチダウンiQは3時間) ・周辺作物に飛散しないように注意するとともに、ドリフト低減ノズルの使用が望ましい。
	〈多年生イネ科雑草〉 耕起3日以前(雑草生育期)	500~1000mℓ		
クサトリキング	〈多年生イネ科雑草〉 耕起前まで (雑草生育期草丈 30cm 以下)	250~1,000 mℓ	3回	・少水量散布は専用ノズルを使用。 ・通常 2~7 日で効果が現れ、完全に効くまでさらに日数を要する。
	〈多年生雑草〉 耕起7日前まで (雑草生育期草丈 30cm 以下)	500~1,000mℓ		

(2) 収穫跡地の酸度矯正

近年、低 pH による作物への障害が見られます。今年のうち pH5.5 以上を目標に積極的に酸度矯正を実施し、適正 pH の維持に努めましょう。

(3) 後作緑肥の作付け

地力の維持増進のため、小麦収穫跡地には緑肥作物を作付けしましょう。後作にながいも・ごぼうなどを作付けする場合は、キタネグサレセンチュウ対策のため、えん麦野生種が有効です。えん麦野生種はばれいしょのそうか病軽減効果もあり、「ヘイオーツ」では小豆落葉病の抑制効果も知られています。表 2 を参考に、ほ場の条件に応じた緑肥を選定しましょう。

表 2 小麦後作緑肥の栽培例（北海道緑肥作物等栽培指針）

緑肥作物名	は種時期	は種量 (kg/10a)	施肥量(kg/10a)			すき込み 時 期
			窒素	リン酸	カリ	
えん麦	8月上～ 中旬	15～20	4～6	5～10	0～5	10月中旬～ 10月下旬
えん麦野生種 (ソイルセイバー、サイヤー、 ヘイオーツ)		10～20	5	5	0～5	
シロカラシ類 (キカラシ) ※注1、2	8月上～ 下旬	2	5～8	5～10	0～7	
ひまわり (りん蔵) ※注2	8月上～ 下旬	1.5～2	4～6	8～10	0～10	

※注1 ・そうか病発生ほ場では前作として用いない。

・根こぶ病発生の恐れがあるので、前作又は後作にアブラナ科野菜の作付けはしない。

※注2 キタネコブセンチュウやキタネグサレセンチュウの密度を高めるので、後作物の選定に注意する。

★令和4年産（2022年産）の小麦づくりに向けて！

- ・高収量・高品質の小麦づくりは、適期適正は種からスタートします。
- ・詳細は9月上旬に「は種前情報」を発信しますので、参考にしてください。

2 ばれいしょ

茎葉黄化期は平年よりも早く、8/15 現在ではイモ数はやや少なく、1 個重は重い傾向ですが、高温少雨のためほ場間差が大きくなっています。

(1) 茎葉枯凋処理（主に生食用、加工用）

茎葉処理は試し掘りを行い、いもの肥大状況を確認してから処理しましょう。

★処理時期の目安（試し掘り）

生食用：出荷規格に応じた大きさになっていること

加工用：肥大状況・でん粉価が出荷規格に適するものとなっていること

① 薬剤による処理方法

茎葉枯凋剤の散布は、塊茎が目標の大きさに達した時期に晴天無風の日を選んで散布してください。

表3 茎葉枯凋処理剤

薬剤名	使用量 (ml/10a)	水量 (L/10a)	使用時期	使用回数 (以内)
デシカン乳剤	250～450	100	茎葉黄変始～ 収穫3日前まで	2回

- ※接触剤のため茎葉にまんべんなく薬剤を付着させる。
- ※茎葉黄変期前に使用した場合、枯凋が不完全になる場合がある。
- ※処理後2～3時間以内に、降雨が予想される場合には使用を避ける。
- ※土壌が極端に乾燥しているときは、水分ストレスにより維管束褐変を生じやすくなるため使用を避ける。
- ※散布の際にはドリフトを起こさないように注意する。

② リーフチョッパーによる方法

リーフチョッパーを使用する場合は以下の事に注意してください。

- ・茎葉処理作業は茎葉黄変期後の好天時に行う。
- ・塊茎の損傷や緑化防止のため、刈取り高さは培土を崩さないよう地表から余裕をもたせて処理する。
- ・機械後部に石れきが飛散しやすく危険なので、周囲に人がいないことを確認してから作業する。

(2) 収穫作業

- ・収穫作業は茎葉枯凋から、2～3週間後をめどに、いもの皮むけが生じないことを確認して、晴れた暖かい日に行いましょう。収穫が早すぎると、収量、でん粉価の減少、皮むけなどの障害が発生する可能性があります。
- ・収穫が遅れると、黒あざ病による腐敗、緑化、品質の低下が懸念されます。
- ・掘り取り後は腐敗を防ぐため、風乾を十分に行ってください。
- ・選別時や網コン等への投入時には、傷、打撲などができないよう注意しましょう。

3 豆 類

生育は平年に比べ早まっています。大豆が+6日、小豆は+2日、菜豆（大正金時）は+6日、手亡は+6日です。

過繁茂傾向の畑も見られます。今後の菌核病、灰色かび病の発生に注意しましょう。

(1) マメシクイガの防除（大豆）

マメシクイガは莢伸長始（およそ半分の株に2～3cmの莢が認められた日）になってから、5～7日程度で莢へ産卵を始めます。産卵の最盛期から7～10日間隔で2回程度防除しましょう。甲虫類の食害が目立つ場合は、有機リン剤（スミチオン乳剤）を使用しましょう。

表4 マメシクイガの防除薬剤例

薬剤名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	成分 (系統名)	備考
ゲットアウトWDG	3,000	7日	3回	シフルリン (ピレスロイド)	アブラムシ類に 登録あり
スミチオン乳剤	1,000	21日	4回	MEP (有機リン)	カメムシ類に 登録あり
プレバノンフロアブル5	4,000	7日	2回	クロチアニプロール (ジアト)	

(2) 灰色かび病・菌核病の防除（小豆）

小豆・菜豆で倒伏が多々見られるため、灰色かび病・菌核病の発生が懸念されます。適切なローテーション防除を行ってください。 ☆ () 内は R3 池田作況平均の場合

◎ 小豆防除適期

2回目：1回目防除の10日後（8/13～8/16）

3回目：2回目防除の10日後（8/23～8/26）

表5 灰色かび病、菌核病を中心とした防除例（小豆・菜豆）

回数	薬剤名	成分 (系統名)	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	炭そ病に 対する効果
2回目	ブロードワン顆粒水和剤	チオファネートメチル・メハニピリム (MBC・AP)	1,000	14日	4回	○
	プライア水和剤	ジエトフェンカルブ・ベノミル (N-フェニルカーバメート・MBC)	1,000	14日	4回	○
3回目	ファンタジスタ顆粒水和剤	ピリベンカルブ (QoI)	2,000	7日	3回	○

※ブロードワン顆粒水和剤はチオファネートメチルを含むので、他剤との総使用回数(4回)に注意する。

☆その他登録薬剤については「7/15付技術情報」や「令和3年度農作物病害虫防除基準」参照

(3) インゲンマメゾウムシの防除（菜豆）

インゲンマメゾウムシの成虫は、7月下旬以降に出現し、8月上旬～9月上旬に発生が見られ、成熟の早い菜豆が被害を受けやすくなります。防除時期は、下記を目安にしてください。

◎ 金時防除適期：莢の色が抜け、白莢が見える時期（8月中旬～）

◎ 手亡防除適期：子実が大きくなり、莢の色が抜けて白莢が見える時期
（8月下旬以降、金時から1週間後程度が目安）

表6 インゲンマメゾウムシの防除薬剤例

薬剤名	成分 (系統名)	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	備考
バイスロイド乳剤	シフルリン (合成ピレスロイド)	2,000	7日	3回	アブラムシ類に 登録あり。
ダントツ水溶剤	クロチアニジン (ネオニコチノイド)	2,000	前日	3回	アブラムシ類に登録 あり。(2000～4000倍)

(4) ハダニ類の防除（豆類全般）

ほ場の外周にハダニ類の発生が見られます。高温乾燥により増殖し、生育不良となる恐れがあります。ほ場を観察し、適期防除に努めてください。またほ場の内部に発生が見受けられない場合は、外周のみ薬剤の散布を行いましょう。

表7 ハダニ類の防除薬剤例

作物名	薬剤名	成分 (系統名)	使用倍率 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
大豆	トクチオン乳剤	プロチオホス (有機リン)	1,000	30日	3回
小豆・菜豆	ダニロンフロアブル	フェンピロキシメト (METI)	1,000~2,000	7日	1回

☆トクチオン乳剤はマメシンクイガとの同時防除が可能。

(5) 金時の収穫

成熟期は平年と比べ早い見込みです。早めの準備に努めましょう。ほ場毎の登熟状況と天候を見ながら、収穫方法に応じて適期収穫と乾燥調製に努めましょう。

収穫が早すぎると、へこみ・つぶれ粒が発生しやすくなり、収穫が遅れると色流れ粒・裂皮・割れ粒が発生しやすくなります。収穫時には収穫機械、脱穀機の調整を確認するようにしましょう。

○ピックアップ収穫

- ・ 収穫・脱穀適期：完熟期（熟莢率ほぼ100%）から6日以内
- ・ 作業速度：0.7m/s以下
- ・ 倒伏程度によらず収穫が可能（ビーンハーベスタまたはビーンカッタ）

○ダイレクト収穫

- ・ 収穫・脱穀適期：完熟期（熟莢率ほぼ100%）から6日以内
- ・ 作業速度：0.6~0.8m/s（総重量700g/m²以上では0.6m/s未満）
- ・ 倒伏が見られるほ場では、作業機の速度は0.5m/sで収穫してください。倒伏がひどいほ場では追い刈り収穫を行ってください。

・ 脱穀時は子実水分を考慮し、こぎ胴の回転数を調整します。

※26%以上の高水分では押傷・つぶれ粒が多発し、18%以下の低水分ではこぎ胴が低回転でも裂皮粒が多発します。また、適水分（19~23%）でも300回転以上では損傷粒が発生します。

《参考》金時の子実水分の簡易判定基準(H13十勝農試技術普及部)		
子実水分(%)	指で押した場合	爪で押した場合
30	強く押すと弾力性を感じる	爪痕の周囲が広範囲にへこむ
22	強く押すとへこむ	爪痕の周囲が広範囲にへこむ
20	へこまない	爪痕が深くへこむ
18	へこまない	爪痕が浅くへこむ
15	へこまない	爪痕がかすかにつく(完熟)

4 てんさい

褐斑病は、発生したあとは気象条件により急速に進展するため、ほ場をよく観察し適期防除に努めてください。

【(1)と(2)のそれぞれの薬剤例は7月15日号および「ほのぼの情報」参照。】

(1) 褐斑病の防除

カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー）の残効期間は、DMI剤、マンゼブ剤より短いため、散布間隔に留意してください。

なお、DMI剤およびカスガマイシン剤は道内で広く耐性菌の発生が確認されています。可能な限り使用回数を低減してください。また、DMI剤はマンゼブ剤と同時に使用しましょう。

(2) ヨトウガの防除

4齢幼虫以後は薬剤の効果が下がるため、ほ場を観察し、防除適期を逃さないようにしましょう。

表8 8月中～下旬の防除例

防除時期	対象病害虫	農薬名	成分または系統名	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数
8月中下旬	褐斑病	カスミンボルドー	塩基性塩化銅 カスガマイシン	800	7日	5回
	ヨトウガ	カスケード乳剤	ベンゾイル尿素 (IGR)	4,000	7日	4回
		マッチ乳剤	ルフェルノン (IGR)	3,000	14日	2回

※マンゼブを含む剤の総使用回数は5回まで

(3) 床土の準備

来年用の床土を準備する際には病気の恐れのない土を用意し、pH測定後、6.0～6.5になるよう酸度を矯正しましょう。

ほのぼの情報や農作物防除基準を参考に適正防除に努めてください。